様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０５１８９

研究課題名（和文）中国の越境的移動・境界侵犯・異種混交より生成する新しい「社会」に関する実証研究

研究課題名（英文）Chinese studies on new generating society through boder movement, invasion and a different kind mixture of crossing the border movement

研究代表者
首藤　明和（SHUTO, Toshikazu）

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：６０３４６２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,700,000円

研究成果の概要（和文）：移動・越境・混交に関する調査研究から得られた理論的知見として、例えば以下のものがある。(1)構造（時空、慣習、記憶、予期）や意味（指し示すもの／指し示されないもの）への着眼から、生成と消滅を繰り返す本来的に非平衡的な差異が平衡するその均衡点に、「持続可能な社会」＝「共生の作法」が展望できる。(2)中国雲南保山回族の共生の作法にみる「言説の資源」が、状況的な自己呈示と自己記述を可能にし、異なるものが共存するための意味の選択を支えている。(3)移動のなかの共在的あるいは同時的な〈場所〉の実践的な組み合わせが、新しい社会システムを生み出す上でのひとつの源泉となっている。

研究成果の概要（英文）：Theoretical knowledge obtained from the research about movement, border invasion and a different kind mixture of crossing the border movement, for example, the following. (1) Through the analysis of structure (space-time, custom, memory, anticipation) and the meaning (the thing that it is not shown thing / to show), We can discover“sustainable society”=“coexist manners”at the equilibrium point where a nonequilibrium difference balances inherently repeating generation and extinction.(2)“The resources of the discourse”in the Chinese Yunnan Baoshan Muslim Huizu enable situational self-exhibition and self description and support the choice of the meaning for the manners of coexist.(3)It is one of the sources bringing about the new social system that a practical combination of places where are concomitance and simultaneous in the movement.

研究分野：社会学、中国社会論、アジア社会論

キーワード：社会学　移動・境界侵犯・混交　グローバリゼーションと規範　歴史・記憶・予期　華人・華僑　回族　社会システム理論　比較アジア社会論

１．研究開始当初の背景

(1)グローバリゼーションでは、ヒト、モノ（文物、商品、貨幣、資本など）、コト（信仰、権力、価値、学問など）の移動が常態化し、情報伝達の範囲や深度が拡充する。移動は境界に関わり、境界の侵犯と差異の混交は遍在化する。

(2)世界の多様性に価値前提を置く諸研究では（例えば、Bhabha, Homi, *The Location of Culture*, Routledge, 1994）、移動がもたらしたり強調したりする差異は，決して社会の攪乱要因などではないこと、むしろ、生成と消滅を繰り返し本来的に非対称な関係にある差異そのものが，なんらかの契機に平衡するその均衡点においてこそ（福岡伸一『新版 動的平衡』小学館、2017 年）、持続可能な社会も展望できるということを示唆している。

(3)当然、移動・差異・動的平衡といった、多様性や流動性を前提とする世界では、「国民国家」といったものを充足的な「全体社会」として捉えることはできず、ましてや、国民国家を支えるものとして社会文化構造を考察することは、経験的分析というよりは、むしろ何らかの価値前提にかかわったイデオロギー的分析とでもいえよう。

(4)このように、グローバリゼーションが進展する現在、「社会」あるいは「全体社会」に関する認識や方法が問われている。そして、この理論的課題に関連して、グローバリゼーションの下で越境をともなう移動が常態化するなかで、境界侵犯や異種混交がもたらす創造性や革新性を抽出し評価できる理論や方法が必要となっている。加えて、共生などの実践や作法を支える価値基準（規範）も求められている。

２．研究の目的

本研究の目的は、越境をともなう移動が、境界侵犯や異種混交をもたらすなかで、グローバリゼーションにおいていかなる社会（コミュニケーションを基盤的作動とすることで環境との境界が設定され、同時に、セルフ・リフレクションと自己記述を通じて、可変的かつ開放的に境界が設定される社会）が生成し、かつ、再帰的に更新しているのか、実証的および理論的に考察することである。

３．研究の方法

社会（全体社会）を把握する理論的方法として、以下の３点に留意した。

(1)社会システム理論の視座、すなわち、生命／意識の心身二元論に対する第三の領域としての社会――「コミュニケーション」が、その作動において閉じることで環境との開放的境界を設定し、自己記述を通じて境界を更新していく――に着眼した分析を重視した。

(2)同じく社会システム理論の視座から、社会システムの構造を時空、慣習、記憶、予期から明らかにする方法を重視した。

(3)動態的視点、すなわち、定住よりも移動に、Roots（起源）よりも Routes（経過）に分析の焦点を当て（Clifford, James, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Harvard University Press, 1997.）、社会の統一を、越境や混交など流動するモノ・コトのなかで、危うく動的に平衡する均衡点――例えば、聖と俗、救済と罪、排除と包摂、展望と抑制、ジェンダー、民族と国家、国籍と市民権など――において捉える視点を重視した。

以上のような理論的方法に基づきながら、特に現地調査については、各調査地での研究目的に応じて、以下のような調査を実施した。

(4)中国雲南省保山市Ｙ村の調査では、明清四大イスラーム漢文訳著家・馬注（1640-1711）に関連した資料を収集した。また、当地域の回族が、馬注の墓や故郷、伝承などの発見や、馬注思想の発揚を通じて、漢族など他の民族とともにまちづくりをおこなっていることに注目した。

(5)本研究の事前に実施した、内モンゴル錫林郭勒盟Ｄ旗Ｈ合作社の事例調査では、①資本や資源をめぐる中心と辺境の時空の圧縮と輻輳、②中央による現地住民当事者の排除、③生活や環境問題打開のために、民族の伝統的知識や社会関係資本をもつキーパーソンが、話し合い、参加、能力、地域などを制度化していくなかで発揮している問題解決能力が浮き彫りになった。こうした知見を踏まえつつ、特に本研究では、越境するモンゴル族に焦点を置き、移動のなかでの民族性を考察するために、北京在住モンゴル人二世を対象にインタビュー調査を実施した。

(6)中国残留日本人が多く居住していた黒竜江省Ｆ県の調査で、海外（とくに日本における「中国帰国者」）流出と外国人の流入、現地での異文化共存の実態に関する調査を実施した。

(7)長崎や平戸（福建の媽祖信仰や鄭成功に所縁のある地域）、函館、中国東北地方、東南アジア・ラオスにおける華僑・華人の芸能、祭祀、エスニシティに着目し、現地調査を通じて、異文化が生み出す観光価値を活用した観光戦略などについて分析した。

(8)日本の再生産領域（家族）における国際移動の実態と、地域の国際化について、現地調査を行い、特に国際結婚家族に対する支援のあり方を検討した。

(9)また、各地での調査に共通して、インタビュー調査では、①移動を促進する歴史的、文化的、社会的背景、②移動にともなう境界侵犯と異種混交がもたらす社会変化や文化変容、③移動をめぐる規範と実践、④移動にともなう文化の循環性（再生、転生、創生など）と新しい「社会」の生成や更新などを考察するための質問をおこなった。

(10)さらに、公文書館等では、移動の動機やその社会的・歴史的背景、送出地と移入先の関係、移住連鎖、移入先での先住者と移入者の関係、家族や民族、国家との関係などを分析するための資料収集を行った。

(11)なお、研究組織では、ディシプリンや専門領域を、スタディーズ（移動、越境、混交にかかわる問題群への多様なアプローチが図られる場）として学際的に結びつけて編成した。すなわち、研究代表者として首藤明和（社会学：中国雲南回族、タイ・チェンマイの中国雲南系ムスリム）、研究分担者として森川裕二（政治学：アジア主義と京都学派）、王維（文化人類学：日本や中国東北地方、北アメリカ、東南アジアにおける華僑・華人の芸能、祭祀、エスニシティ）、賽漢卓娜（ジェンダー論：日本の国際結婚、北京在住モンゴル二世のエスニシティ）、南誠（歴史社会学：中国東北地方、沖縄、日本における「中国帰国者」）が、各自の専門性に基づき、課題の遂行に必要な資料を収集し、分析をおこなった。

４．研究成果

研究成果として、以下の知見を得た。

(1)明清四大イスラーム漢文訳著家・馬注に関連する資料を収集し分析した。その結果、雲南保山の回族が、漢族やその背後にある国家との「共生の作法」を編み出していく基盤には、「言説の資源」の蓄積と選択が大きな役割を果たしていることが明らかになった。すなわち、馬注の主著『清真指南』の解釈とその思想の発揚を通じて、自己記述を可能にする形式（環境との区別）を洗練化するとともに、区別の両側（システム／環境）を観察しつつその片側（システム）を指し示す自己呈示の選択が、保山回族によって図られていた。

(2)馬注思想の特徴は以下のものである。①一神論を堅持しつつ、イスラームと儒学の関係を漢語で注釈し、「孝道」や「人道五倫」（君臣之義、父子之親、夫婦之別、長幼之序、朋友之信）といった儒家思想の掲げる社会的機能を評価、イスラームの教えと同一視した。②宗教は時と場所に応じて旧来の制度、慣習、方法などを自ら革新するものと考え、「権教」（変化の内容）と「因教」（変化の方向）を思索した。③一神論のなかで、「ムスリムは「真主」と「君主」双方に忠実であれ」とする「聖俗並存的信仰体系」を編み出し、この「二元忠貞」（二元忠実）という二重信仰形態が、今日の「愛国愛教」につながるひとつの雛形となっている。④イスラーム法のなかでも「イバーダート」、すなわち宗教儀礼に関する諸問題に関心を払い、神にたいする人間の奉仕のあり方について、特に「五行」（信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼）のあり方について、思索を深めた。その一方で、犯罪・罰則、婚姻・離婚、相続、商取引、異教徒との交渉などに関する規定「ムアーマラート」については、中国の皇帝が定める律に抵触するため、積極的に言及しないよう努めている。

(3)こうした「言説の資源」が、自己記述と自己呈示にみる、雲南保山回族の「共生の作法」を支えている。また、この「言説の資源」のストックとフローを可視化する共在的および同時的な「場所」が保山回族によって発見、呈示され、「歴史の逆説性」（解釈を通じて、受難の歴史――例えば、清末の鉱山所有をめぐる漢族との抗争に端を発して、清王朝にそそのかされた漢族の結社がムスリムを虐殺した。さらにその後、ムスリムの杜文秀が民衆蜂起とともに打ち立てた大理国が、清軍によって倒された後、雲南ムスリムは虐殺され、人口は十分の一に激減した――を反転させ、誰に対しても居場所が開かれた世界を求めていく志向性）が、将来は再び現前化するかもしれない第三者（漢族や国家）に対する予期・備えになっている。

(4)なお、保山における馬注の文化復興事業では、ミャンマーやタイに移住した雲南系ムスリム（大理国崩壊後の雲南ムスリムのミャンマーへの大量移住や、国共内戦期から新中国成立期の国民党関係者及びそこに巻き込まれた民間人等の移住が背景にある）からの経済的支援が不可欠だったことも明らかになった。

(5)また、雲南回族のあいだでは、国境を越えたイスラム・ネットワークが再生し、就職、進学、交易、信仰などを契機に、都市－農村間および国家間に至る広範囲での越境的移動が活性化している。この背景には、地方政府が財源の獲得を狙って農地収用と不動産開発を行う「城鎮化」と、農地を失った「失地農民」の就業機会を求めた移出の増加などが指摘できる。国有企業など目ぼしい雇用先もない保山の地域経済において、生産年齢人口の離家・離村型出稼ぎの増加は、回族に比べて、特に漢族青少年層の生活や意識、進路などに深い影響をもたらしている。

(6)また、漢族や回族を問わず、伝統的な家屋・屋敷地や村落などの生活の場を失った高齢者たちが高層アパートに分散して入居したことで、高齢者自身の社会的ネットワークが衰退している。生産年齢人口家族の不在と相まって、老親扶養に影響が出ている。

(7)保山Y村では、モスク・コミュニティの物質的、空間的な消失が、第三者（漢族や国家）に対する意識の変化をもたらしている。モスクの敷地内に高齢者のための集会所・簡易宿泊施設などを急いで整備しているが、身辺に家族・近隣の支援者を持たない高齢者は、高層アパートからの外出もままならない。

(8)長崎、平戸、福建省福州や福清などの媽祖や鄭成功にまつわる祭祀、儀礼、民俗、風習や、飲食文化の伝播と受容のメカニズム、僑郷の記憶・記述・構築などについて資料を収集し、オリエンタリズム的表象やディスコースに対抗しうる日常的実践が生活世界で展開し、新しい市民活動を生み出すと同時に公共的空間の再編を促していることを明らかにした。

(9)また、約100万人の在日中国人のうち３割を占めるものの、ほとんど先行研究で注目されることのなかった中国東北出身者の移住、職業、アイデンティティ、適応などに関する資料の収集に努めた。

(10)さらに、第５、６世代の世代深度を有する老華僑社会の変容を、開港都市長崎と函館の歴史と現在から考察した。また、ラオス・ビエンチャンの新移民とチャイナタウンの形成に関する資料収集を行い、今後、継続調査を予定している中国雲南系移民のトランスナショナル・ネットワークの分析に備えた。

(11)中国残留日本人が多く居住する黒竜江省の移民の実態や、日本における「中国帰国者」の実態分析を通じて、東アジアの地政学的情勢と国家政策が、人びとの移動に強く影響していることを明らかにした。

(12)国際結婚を通じた中国人女性のトランスナショナルな移動と性別役割観念の経験を、国家、社会、法制度、労働市場との交渉に見出せる「ナショナルな標準家族」の特徴や、多文化家族と支援のあり方などから考察し、日本の国際結婚家族が置かれている状況と支援のあり方を明らかにした。

(13)特に、国際結婚という再生産領域におけるトランス・ナショナルな移動が、「国民的市民社会」（市民権よりも国籍に重きを置く市民社会）における親密圏の変容と公共的世界やコミュニティの再編を促し、グローバリゼーションにおける新たな社会の生成に導く可能性があることを明らかにした。

(14) 北京在住モンゴル人２世の調査を通じて、「民族コミュニティ」の社会文化的統合（言語、配偶者選択、文化的アイデンティティ）などを明らかにした。内モンゴルで生じている、漢族流入にともなう人口増加と急速な都市化、伝統的生業である遊牧の制限と農業の奨励、天然資源の乱開発、公教育での漢語教育の普及などをプッシュ要因として、生活機会や生活の質を求めた自治区を跨る越境的移動が高まり、モンゴル族の社会や文化を激しく揺さぶっている

以上、各調査地から得られた知見は、越境や混交に関する理論についていかなる貢献をなしうるのか。あるいは、共生などの実践や作法を支える価値基準（規範）の形成において期待できることは何か。例えば、以下のようなことが考えられる。

(15)①構造（時空、慣習、記憶、予期）や意味（指し示すもの／指し示されないもの）への着眼から、生成と消滅を繰り返す本来的に非平衡的な差異が平衡するその均衡点に、「持続可能な社会」＝「共生の作法」が展望できること、②雲南保山回族の共生の作法にみる「言説の資源」が、状況的な自己呈示を可能にし、異なるものが共存するための、適切な意味の選択にかかわっていること、③移動のなかの共在的あるいは同時的な〈場所〉の実践的な組み合わせが、新しい社会システムを生み出す上での源泉のひとつとなること、④こうした〈場所〉の組み合わせと関連した社会生成のメカニズムを把握するために、構造（時空、慣習、記憶、予期）に着眼した方法論が必要であること、⑤事象、時空、社会にまつわる意味、すなわち、ことがらに関する差異と統一、「これまで」と「これから」に関する差異と統一、「あいだがら」に関する差異と統一から、社会の生成と更新を捉える方法論、あるいは、心身二元論の桎梏から解き放たれて、第三の領域であるコミュニケーションに関連づけて、意識や身体に関する存在論的、認識論的な把握を試みる方法論が必要なこと、⑥出来事が物質化し客観化した社会的現実としてのカテゴリーと、存在論的な思考の堅い枠組み（時空、人格、実体など）との交叉によって生まれる分析事象は、むしろカテゴリーと親和的なRootsではなく、カテゴリーを越えるRoutesに着眼することで、差異や形式の分節化に関する動態的射程を獲得できること、⑦差異が輻輳したり置換されたりする多様性とそれへの参画のなかに、今後の社会システムの規範的なあり方を探求する鍵が横たわっていることなどが、本研究を通じて得られた理論的展望である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１３件）

①王維，2018，「社会空間としてのラオスチャイナタウン」『インターカルチャー』16，134-144 頁，査読有.

②南誠，2018，「『多みんぞくニホン』のかたち――多文化「共創」社会の実像」『多文化社会研究』4，29-31 頁，査読無.

③南誠，2018，「『多みんぞくニホン』の歴史と境界文化」『多文化社会研究』4，33-55 頁，査読有.

④南誠，2018，「『中国帰国者』問題の研究可能性――生成的な境界文化の探求をめざして」『グローカル研究』5，73-88 頁，査読有.

⑤首藤明和，2017，「新たな〈学〉としての「多文化社会学」に向けて」『多文化社会研究』第３号，87-91 頁，査読無.

⑥首藤明和，2017，「モダニティのグローバリゼーション論に向けて――社会学の存在論的，認識論的前提に対する批判的検討から」『多文化社会研究』第３号，93-104 頁，査読有.

⑦賽漢卓娜，2017，「歴史の町・長崎から見た多文化「共創」――長崎の唐通事・老華僑・新華僑を中心に」『国際人流』367, 18-23 頁，査読無.

⑧王維，2017，「華僑及び華僑文化の現地化――長崎ちゃんぽんと函館ラッキーピェロの事例を通して（中国語）」『華僑華人歴史研究（北京）』，1-9 頁，査読無.

⑨佐竹眞明・李原翔・李善姫・金愛慶・近藤敦・賽漢卓娜・津田友理香，2017，「多文化家族に対する支援――愛知・大阪・神奈川の事例から」『名古屋学院大学論集』53-3, 105-137 頁，査読無.

⑩王維・藤村和宏，2017，「異文化性が生み出す観光価値を活用した観光戦略――長崎の「祭り」を中心に」『香川大学論叢』88-4，1-46 頁，査読無.

⑪王維，2016，「日本中国音楽伝播与脈絡」『東亜漢学研究』6，442-451 頁，査読有.

⑫王維，2016，「記憶・構築された『回』の時空間――泉州地域百崎回族郷を事例として」『21 世紀東アジア社会学』 8，36-56 頁，査読無.

⑬金愛慶・馬兪貞・李善姫・近藤敦・賽漢卓娜・佐竹眞明・メアリーアジェリン・ダアノイ・津田友理香，2016，「韓国の多文化家族に対する支援政策と実践の現状」『名古屋学院大学論集』52-4，113-144 頁，査読無.

〔学会発表〕（計１８件）

①王維，2017，“An Analysis of Northeast Chinese Immigrants in Japan” The 11th Regional Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas (ISSCO 2017 Nagasaki)，長崎大学，国際学会.

②王維，2017，「太平洋戦争時期九州（長崎）華僑的生活史料初探」，Recapture “endangering” social life: source materials and ways of living of the East Asian Overseas Chinese during the Pacific War period，香港中文大学，国際会議，招待講演.

③賽漢卓娜，2017，「在“主妇化”与“持续就业模型”之间－以日本的华裔已婚女性为例」世界海外華人研究学会（ISSCO）長崎大会，長崎大学，国際学会.

④賽漢卓娜，2017，「北京市在住モンゴル族移民２世のエスニシティの生成と変容」日本社会学会第 90 回大会，東京大学.

⑤賽漢卓娜，2017，「日本の多文化教育背景の下における移民二世の教育達成」第 8 回未来知識人フォーラム（ISSCO），ソウル，国際会議，招待講演.

⑥南誠，2017，「中国帰国者的界限文化与身份認同:華僑和日僑之間」，世界海外華人研究学会第 25 回「グローバルとローカルのダイナミズム」，国際学会，招待講演.

⑦南誠，2017，「中国帰国者問題の研究可能性：生成的な境界文化の探究をめざして」，国際シンポジウム「ポスト西洋社会学へ:東と西との対話」，成城大学経済研究所，国際会議，招待講演.

⑧南誠，2017，「近代東亞的界限文化研究：歸還移民和歷史記憶的國際比較」，台湾中央研究院近代史研究所「知識史研究群」講演会，台北市中央研究院近代史研究所，国際会議，招待講演.

⑨王維，2016，「移居、変遷与文化：全球化地方化視野中的唐人街」，International Symposium on International Migration and Qiaoxiang Studies，五邑大学：中国・江門，国際会議，招待講演.

⑩首藤明和，2016，「越境」に対する社会学の射程と限界――存在論，認識論，方法論から問うために」，中国社会学会中日社会学専業委員会（中日社会学会），北京第二外国語大学：中国・北京，国際学会，招待講演.

⑪賽漢卓娜，2016，「女性結婚移住者の就労問題」，中国社会学会中日社会学専業委員会（中日社会学会），北京第二外国語大学：中国・北京，国際学会.

⑫南誠，2016，「超越国境的中国残留日本人記憶」，南京大学シンポジウム「鐘山論壇」，南京大学：中国・南京，国際会議，招待講演.

⑬王維，2016，「日本社会と一体化した中華飲食文化」，International Conference on Chinese Food and Culture in Local and Global Perspectives，中山大学：中国・広州，国際会議.

⑭王維，2016，「社会資本与網絡：以函館華

僑為例」，ISSCO(世界華僑華人研究学会) 2016 Conference in Vancouver，シェラトンホテル（カナダ・バンクーバー），国際学会.
⑮賽漢卓娜，2016，「地方における国際結婚の展開」比較家族史学会シンポジウム「出会いと結婚」，近畿大学（大阪府東大阪市）.
⑯賽漢卓娜，2016，「北京市在住モンゴル族移民２世の文化的アイデンティティ」，日中社会学会第 28 回大会，長崎ブリックホール（長崎市）.
⑰王維，2016，「長崎華僑の歴史とその現在――『老華僑』の変容を中心に」，日中社会学会第 28 回大会シンポジウム「越境を考える――その課題と可能性」，長崎ブリックホール（長崎市），招待講演.
⑱南誠，2016，「越境する中国帰国者――生成的な境界文化の可能性をめぐって」，日中社会学会第 28 回大会シンポジウム「越境を考える――その課題と可能性」，長崎ブリックホール（長崎市），招待講演.

〔図書〕（計１１件）
①王維，2018，「大学的長崎ガイド――こだわりの歩き方（第１部　長崎新地中華街）」木村直樹責任編集『大学的長崎ガイド――こだわりの歩き方』昭和堂，3-22 頁.
②森川裕二，2018，「国際通信発祥の地・長崎と世界」木村直樹責任編集『大学的長崎ガイド――こだわりの歩き方』昭和堂，93-109 頁.
③賽漢卓娜，2018，「結婚移住女性と地域社会　（2）地方（農村）の結婚移住女性」移民政策学会設立 10 周年記念論集刊行委員会編『移民政策のフロンティア――日本の歩みと課題を問い直す』明石書店，234-238 頁.
④首藤明和，2017，「雲南保山回族にとっての国家――記憶と予期に裏付けられたシンボル的な存在として」櫻井義秀編『現代中国の宗教変動とアジアのキリスト教』北海道大学出版会，323-347 頁.
⑤賽漢卓娜，2017，「日中国際結婚夫婦にとっての支援とは」佐竹眞明・金愛慶編『国際結婚と多文化共生―多文化家族の支援にむけて』明石書店，39-68 頁.
⑥賽漢卓娜，2017，「「ナショナルな標準家族」としての日本の国際結婚」平井晶子・床谷文雄編『出会いと結婚 家族研究の最前線２』日本経済評論社，71-101 頁.
⑦賽漢卓娜，2017，「モンゴル族の移住」華僑華人の事典編集委員会編『華僑華人の事典』丸善出版，238 頁.
⑧首藤明和，2016，「中国にみるトランスナショナリズム――グローバル行為の規準へ」西原和久・樽本英樹編『現代人の国際社会学・入門――トランスナショナリズムという視点』有斐閣，55-74 頁.
⑨賽漢卓娜，2016，「另一種移動―朝鮮族女性婚姻移民及其娘家的家庭策略」麻国慶編『社会転型与家庭策略』世界図書出版広東有限公司，328－346 頁.
⑩南誠，2016，「「中国帰国者」系日本人――生成的な境界文化の可能性」駒井洋監修・佐々木てる編『マルチ・エスニック・ジャパニーズ：○○系日本人の変革力』明石書店，203-218 頁.
⑪南誠，2016，「中国帰国者と身分証明」陳天璽等編『パスポート学』北海道大学出版会，224-230 頁.

〔その他〕（計３件）
①南誠，2018，「リスク社会における境界文化の創発性――中国帰国者の『存在論的不安』の対処法を手がかりとして」，長崎大学シンポジウム「リスク社会をめぐる人文社会科学の超域的枠組み構築へ向けて」，長崎大学.
②首藤明和，2017，「社会システム理論におけるリスク論――N．ルーマンを中心にして」，長崎大学重点研究課題公開研究会「現代世界の社会的リスクに関する超越的議論のための理論的検討」，長崎大学.
③南誠，2016，「中国帰国者の境界文化――ナショナリティ、エスニシティ、ジェンダーに着目して」，北海道大学シンポジウム「帝国の解体と女性――断絶／連続する脱植民地の生活世界」，北海道大学（札幌市）.

６．研究組織
(1)研究代表者
首藤　明和（SHUTO, Toshikazu）
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：60346294

(2)研究分担者
王　維（WANG, Wei）
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：10322546

賽漢卓娜（SAIHANZHUONA）
長崎大学・多文化社会学部・准教授
研究者番号：20601313

南　誠（MINAMI, Makoto）
長崎大学・多文化社会学部・准教授
研究者番号：70614121

森川　裕二（MORIKAWA, Yuji）
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：90440221